レキジン・アトリエという試み

木　村　周　平

レキジン・アトリエという試み

木　村　周　平

1．はじめに

筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群人文学学位プログラム 歴史・人類学サブプログラム（2019 年度までは人文社会科学研究科 歴史・人類学専攻）は、歴史学（日本史学、東洋史学、西洋史学、歴史地理学）および人類学（先史・考古学、民俗学・文化人類学）の分野によって構成される、大学院教育の組織である。2021 年 9 月現在この組織に関わるのは 26 人の教員、75 人の大学院生[1]、1 人の特任研究員、2 人の事務員であり、かつてと比べれば規模は小さくなっているが、改組のスピードの速い筑波大学の中では比較的長くまとまりを維持している組織でもある。

本稿は、この歴史・人類学サブプログラムが 2018 年より開催している公開講座「レキジン・アトリエ」について、これまでの経緯を含めて記録として残すとともに、今後の展開を考えることを目的とする。

本稿、およびレキジン・アトリエ自体の背景には、筑波大学だけでなく、より大きなレベルで進行している研究・教育のコンテクストの不安定化・不確実化があることは、言を俟たない。いわゆるネオリベラルな時代状況のもと、大学の経営重視、産学連携の推進、その反面としての基礎的な学問ポストの削減等が、世界的な流れとして進行している。国内でも研究・教育の世界の「改革」の必要性が叫ばれるようになって久しく、1990 年代以降、文部省（2001 年より文部科学省）は、教養部の解体、大学院重点化、国立大学法人化をはじめとして、様々な国際化やグローバル化、あるいは研究者の流動化、カリキュラムの見直しなどに関わる様々なプログラムを、必ずしも一貫した方針を明確に示すことなく導入し、同時に国立大学の基盤的経費の削減も進めてきた。その結果、各大学では毎年のように何かしらの制度改変や、持続性の低いプロジェクトが実施されるようになる一方で、常勤の教職員数が減少し、常勤教職員個々の負担が増大するとともに、若手研究者が非常勤や任期付きなどのきわめて不安定な状態に長く置かれ、質の高い研究・

[1] 2019 年度までの入学者は制度上、専攻の所属となっているが、この数に含めている。

教育の持続・推進という本来の目的の達成は危機的な状態にある。

こうした状況で、現場では何ができるのか。大学を取り巻いているのは大きな構造的な問題であるので、現場では時々、愚痴を言いながら、結局は「改革」のなすがままにされるしかないのだろうか？　論点を先取りすれば、レキジン・アトリエは、こうした状況に対する、現場からの、きわめて小さいけれども前向きな応答の試みのひとつであるといえる。本稿では以下、どのようにしてこれがはじまったのか、実際に何をしてきたのかを説明し、今後についても論じたい。

2．経緯

2.1　前史

レキジン・アトリエが開始されたのは上述の通り 2018 年である。ここではそれまでに歴史・人類学[2]ではどのようなことがあったのかを概観しておきたい[3]。

歴史・人類学では、創設以来、それぞれの分野の先端的な研究者が揃っており、時に激しい対立もあったが、分野を越えた研究・教育上の協働も頻繁に行われ、きわめて創造的な成果を挙げてきた。そうした研究の成果は、歴史・人類学が刊行する雑誌や書籍などからもうかがうことができる。本誌『歴史人類』は 1976 年から刊行されており、1979 年に歴史・人類学専攻の構成員を中心として設立された歴史人類学会が、翌年から『史境』を刊行している。

共同研究から例を挙げれば、大学院重点化という流れが進んでいた 1990 年代には、大濱徹也（日本史学）のイニシアティブのもと、西田正規（先史学）を世話人に、大学院生も参加できる研究会として歴史・人類学談話会が活動していた。その報告書として刊行されたのが、『自然・人間・文化――場としての歴史学・人類学』（1997 年）、および『自然・人間・文化――地域統合と民族統合』（2001 年）である。この研究会は 1990 年代のうちに活動を停止していたようだが、2001 年には歴史・人類学研究科が歴史・人類学専攻に改組され、他方で文部科学省の一大補助金事業「21 世紀 COE プログラム」の募集があるなかで、風間計博（文化人類学）の発案で「破壊と暴力の歴史・人類学的研究」というプロジェクトが構想された。このプロジェクトの成果の一部として、『自然・人間・文化――破壊の諸相』が刊行されている（2002 年）。この『自然・人間・文化』シリーズには、いずれも歴史・人類学専攻の各分野から合わせて 10 名前後のメンバーが執筆している[4]。ただ残念ながら、このプロジェクトは当初の企画通りには実現しなかった。

---

[2] 専攻、学系、研究科など、組織的な位置づけは時代によって変化してきたが、その持続的なまとまりを強調するため、以下では制度名なしの「歴史・人類学」と表記する。

[3] 本節の記述は、山澤学先生から教えていただいた内容をふまえたものである。なお、本文の固有名詞は敬称を省略する。

[4] 目次は以下で見ることができる。https://www.histanth.tsukuba.ac.jp/publication/

その後、2002年度には学系長であった石井英也（歴史地理学）の後押しもあり、内山田康（文化人類学）、浪川健治（日本史学）、山田重郎（西洋史学）らで、後の「水と語りの会」の前身となる研究会が開始されている。なお、この研究会の懇親会で食文化の研究の話題で盛り上がったことで、歴史・人類学の全教員に呼びかけて執筆・刊行されたのが『食文化――歴史と民族の饗宴（シュンポシオン）』（常木晃編、2010年）である。これは人文学類開設の総合科目II「世界の民族」（のち「民族の世界」）のテキストとしての役割もあった。

「レキジン・アトリエ」はこうした、歴史・人類学における、自由な雰囲気で共同して創造的な研究をしていきたい、という土壌のもとで企画されたと言えるが、その直接的な先駆となったものとして挙げられるのが、2013～2015年に行われた人文社会科学研究科公開講座「変革期の社会と人間――「破壊」と「再生」の歴史・人類学」である。これは専攻長であった丸山宏（東洋史学）のもと、山澤学（日本史学）がオーガナイザーとなり、若手教員を中心に毎回2人が登壇し、全3回の日程で、東京キャンパス文京校舎において実施した公開講座である。テーマは、2011年3月11日に発生した東日本大震災を重要な契機として、さらに上記の「破壊の諸相」の継承という側面も考慮して、構想された［山澤2016：vi］。

公開講座は、中高年層が主な受講者だったが、筑波キャンパスから大学院生や学類生が参加するなど、若い受講者もおり、盛況であった。実施時期は授業と重なりにくい1～3月頃であり、天候に恵まれない日もあったが、それでも熱心に参加する受講者も多く、講師としても普段の研究や教育を新たな視点から見直すよい機会となった。それと同時に、この公開講座とその準備のために話し合いを行うことが、教員間で相互の研究を知り、コミュニケーションを深めるうえでも重要な役割を果たした。

この公開講座に加え、山澤は比較文化学類で関連した総合科目も組織・運営し、公開講座と一部重なるメンバーで授業を行った。そのようにしてまとまっていった内容をもとに、2016年には『破壊と再生の歴史・人類学――自然・災害・戦争の記憶から学ぶ』（伊藤純郎・山澤学編、筑波大学出版会、2016年）が刊行された。

この目次は以下のようになっている。

変革期の破壊と再生研究序説（山澤学・日本史学）
古墳の造営と地域社会（滝沢誠・考古学）
自然災害の記録と社会（山澤学・日本史学）
景勝地の風景美の変容（中西僚太郎・歴史地理学）
テロリストの原風景（伊藤純郎・日本史学）
津波とともに生きる人びと（木村周平・文化人類学）
英霊礼讃（村上宏昭・西洋史学）

第二次世界大戦の記憶とアメリカ（佐藤千登勢・西洋史学）
知識人の実践からみる日本社会の「再生」（中野泰・民俗学）
軍用地返還の経緯と跡地利用の実体験（武井基晃・民俗学）

このように、本書は「破壊」と「再生」という大きなテーマのもとに、歴史・人類学専攻の多くの領域をカバーするものとなった。

2.2　レキジン・アトリエの開始

公開講座「変革期の社会と人間」は、本書の刊行をもって、いったんストップし、今後の展開を考えるため、2017 年度は公募に対して申請をしなかった。その間、若手教員間では折にふれ、情報交換のためのインフォーマルな懇談が持たれていた。そこでは、本稿冒頭でふれたような、改組（とくに当時、話題になっていたのは学類・大学院の学位プログラム化）に関わる煩雑な書類作成や会議等が重なり、さらに教員公募が事実上、停止されていたことで個々の負担が増すことによる疲弊感、大学全体として学長主導で華やかなプログラムが企画される一方で個々の教員研究費の配分額の削減も目立つようになっていたことによる閉塞感などが共有され、こうした中で前向きに研究・教育に取り組むためにはどうしたらよいのか、という悩みがしばしば語られた。加えて、学類からの専攻進学希望者の減少（それに伴う進学希望者の全体的な減少）という問題も徐々に意識されるようになってきていた。

こうした事態への対応として、上の世代の教員が行っていた「水と語りの会」のような、教員間の研究会を開催するアイデアが出されたり、新たなテーマを設定しての科研申請が行われたりもし、公開講座の再開も検討されはじめた。そんな中、2018 年の人文社会科学研究科の公開講座公募が開始されると、(1) 東京キャンパスではなく、つくばキャンパスでの実施も可ということが確認されたことで、学類生を主な対象とし、専攻進学希望者増を目的とした講座が可能になる、(2) 同時につくばキャンパスでの実施により、講師陣の負担が軽減されるとともに、教員のより積極的な参加（自分が講師を務める回以外への参加）も可能になる、(3) 研究費が削減されるなか、公開講座実施経費が、わずかであれそれを補うものになりうる（もちろん、公開講座のために使用する経費ではあるが）、という理由で、複数の教員で公開講座への応募の準備が進められていった。話し合いを通じて、方針として (1) 受験者や進学者の増加を目的とし、主な対象者を学内の学生（4 年生に限らず、もっと下の学年も）とすること、(2) 目的に向けて大学院で学ぶことの魅力を伝えることと不安を軽減することを目指すこと、(3) できるだけインタラクティブに、明るいイメージで、(a) 授業であまり話さない、いままさに研究していることや、(b) 教員自身が現在進めている・これまで実施した研究プロジェクト、あるいは (c) どのように「研究する人生」を歩んできたかを話すこと、それに加え、(d) 学生が気になることについても答える、

ということが決まった。

公開講座の応募に向け、タイトルも議論の対象になった。インタラクティブ、気楽な感じを伝えるものとして、「サロン」「カフェ」「茶話会」「たまり場」「語り場」などが挙がったが、最終的に「アトリエ」案が採用された。そこには「講義内容がある意味で学問の“メイキング・プロセス”を紹介する感じになるかなということと、将来への広がりということで、制作･創造のニュアンス」（当時のメールより）が込められている。

そのうえで申請書を作成し応募した。それが無事、採択されると、春学期中の日程が決められ、ポスターが作成された。ポスターに関しても積極的な提案があり、フリー素材の写真を使いつつ、西アジア文明研究センター事務室の廣永尚子さんの協力を得て作成された。

3．実際の活動

3.1　2018 年度

2018 年度は、「レキジン・アトリエ――歴史学／人類学を研究する、というキャリアを描いてみること」と題し、5 回が実施された。時間は主に通常授業の 6 限の時間から始めて 2 時間程度という予定であった。以下が日付と発表者・タイトルである。

第 1 回　2018 年 7 月 24 日

上田 裕之（東洋史学）「歴人漂流記」

柴田 大輔（西洋史学）「楔形文字的生き方」

第 2 回 2018 年 8 月 2 日

武井 基晃（民俗学）「フィールドワークの歩き方」

村上 宏昭（西洋史学）「皿洗いと研究」

第 3 回 2018 年 11 月 9 日

根本 みなみ（日本史学）「数字で見る研究者（仮）生活」

谷口 陽子（考古学）「保存科学への道：考古学から文化財保存へ」

第 4 回 2018 年 12 月 26 日

山澤 学（日本史学）「ピラミッドと東照宮」

木村 周平（文化人類学）「走れ！」

第 5 回 2019 年 2 月 12 日

中込 睦子（民俗学）「耳学問のすすめ」

小口 千明（歴史地理学）「360°どの方位からのご質問もお受けします！」

第 4 回までは、1 人 30 分程度の講演を 2 つと、少人数に分かれたグループトークという構成

で行った。前半の講演では、若手教員および研究員が、どのようにして研究の道に進んできたのかを赤裸々に語った。実は小説家を目指していた、高校教員を目指していた、ピラミッドの研究をしたかった、という若かりし日の将来像や、研究の道に進むに至った偶然的な出会いや出来事、身近な人の一言、さらには院生時代の失敗談や苦労話などが語られたりした。これは聴講していた学生・大学院生にとっても、普段の授業時とは全く違う教員の語りは非常に興味をそそるものであり、また教員にとっても、同僚のこうした話は共感や笑いを誘うもので、結果として教員間の相互理解と連帯感を強める効果があったと言える。

後半のグループトークでは、現役の大学院生たちにも参加してもらい、自由な質疑応答を行ったが、積極的な質問をする学生もいれば、やり取りを熱心に聞いている学生もいて、和気藹々とした雰囲気であった。また終了後には近くの飲食店で懇親会を行うことも恒例となり、ここにも教員・学生あわせて 10 ～ 15 名ほどが参加した。

なお、実施に際して、前章で述べた通りポスターの作成と掲示を行い、大学のウェブサイトにも掲載してもらうとともに、関係教員が授業でビラを配ってお知らせし、さらに当時、活発に活動をしていた学生の自主的な集まりである「歴つくば」に依頼し、twitter で広報してもらった。結果としてこの twitter が功を奏し、春学期に行った 2 回は平均 30 名程度と、企画者の予想を超えた参加者があった。しかし残念ながら秋学期の参加者は減り、10 名前後となった。これについては、広報が開催日直前になってしまったという点と、主要なターゲットである学類学生の都合への配慮という点が影響していたと考える。

第 5 回は当初、予定していなかったものであるが、このレキジン・アトリエという「枠」が好評であることを利用し、専攻長の了解も得て、当該年度で退職される先生方にお話を伺う機会とした。この回についてはふだんの参加者層とはまた違う、OB･OG に当たる世代の参加もあった。お二人とも学生に向けて大変熱心にお話しいただき、参加者一同深い感銘を受けた。

3.2　2019 年度

初年度の一応の成功を受け、公開講座は翌年も継続して申請することとなった。

2019 年度は「レキジン・アトリエ――歴史学／人類学を研究する、というキャリアを描いてみること　season 2」と題し、初年度の繰り返しではなく、より“アトリエ”的な体験型の講義を行うことに主眼を置いて計画された。以下が日付と発表者である。

第 1 回　2019 年 7 月 8 日

後藤 知美（埼玉県立歴史と民俗の博物館 学芸員）・武井 基晃「モノと暮らす」

第 2 回　2019 年 7 月 22 日

上田 裕之・柴田 大輔・村上 宏昭・武井 基晃「文字と戯れる」

第3回　2019年7月26日

谷口 陽子「モノを調べる」

第4回　2020年2月27日

常木 晃（考古学）「現場主義のすすめ」

第5回　2020年3月3日

木村 周平「都市のモノたち」

津田 博司（西洋史学）「ユニオンジャックのゆくえ―旧イギリス植民地と国旗論争―」

第6回　2020年3月4日

山澤 学「蔵からのぞく江戸の文化」

上田 裕之「腐敗した幣制は健全な清朝に宿る」

村上 宏昭「衛生博覧会の時代―健康教育と「怖いもの見たさ」」

初回は民俗学コースの出身者である後藤さんをお招きし、大学院で学んだことを現在どのように仕事として生かしているか、というお話をしていただいた。第2回目は「文字」に焦点を当て、楔形文字や満洲文字などを実際に書いてみるというもので、参加者も多く大変好評であった。第3回目は考古学の分析を行う大型実験装置を見学する、というものであった。前年度に引き続き、参加していた学生のなかには、実際に本専攻を受験し、4月に進学した学生もいる。必ずしも進学を具体的に考えていない低学年の学生においても、おおむね好評を得た。第4回には、当該年度をもって退職される先生に、研究者としての形成過程や、その後のプロジェクトのことなど、非常に貴重なお話ししていただいた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により各種イベントが軒並み自粛していった時期であったが、多くの参加者が参加した。後述のように、第5回・第6回は中止となった。

このように2年目になり、学生の間、および実施側の教員の間でもある程度の浸透が見られ、無事に実施はされたが、参加者数については、初年度と比べてやや勢いに陰りがあったようにも思われる。ここにはカリキュラム改変で授業が15回から10回のものが中心となったことで、学生側の学期中の時間の使い方が変わったことも影響していると考えられる。他方で、昨年と同様、ターゲット層以外の参加者もあった。この点からは、本公開講座が、文系大学院や研究者の生の声を伝え、大学院進学を選択肢としてもらうという当初の目的だけでなく、大学院生がより所属先の教員のことを知り、専攻に対する帰属感を高めたり、教員同士で相互の来歴や研究について理解を深めたりするという、外向きと内向き双方の効果があることが見えてきた。これをさらに発展させる意味で、実施の中心となっている教員同士でお互いの研究について理解を深めよう、と第5回・第6回が計画されたが、感染症が拡大する状況の中、中止となった。

3.3　2020 年度

3 年めの 2020 年度は、当初、誰もが想定していた以上にコロナ禍が拡大し、大学での授業も開始が遅れ、さらにオンライン化という新たな事態に対応しなければいけない、難しい状況下での実施となった。実施を秋学期とすることで、対面での開催に望みをかけたが、夏休み中に相談するなかでオンラインでの実施を中心に考えざるを得ないだろうということになり、前年のうちに少し計画もされていた「ゲーム」などの企画は延期となった。結果として、原点に戻り、若手教員（特にこれまで話をしていないメンバー）を中心に自身の経験について話をしてもらうという形で企画された。

以下が日付と発表者である。

「レキジン・アトリエ Season 3――歴史学／人類学の現場から」
第 1 回　2020 年 11 月 4 日
　岩田 啓介（東洋史学）「『史記』から青海モンゴルへ」
　田中 友香理（日本史学）「日本近代思想史の研究者を目指して」
第 2 回　2020 年 12 月 15 日
　津田 博司「コロナ禍にふりかえる記憶としての歴史学」
　板橋 悠（考古学）「ときどき考古学者」
第 3 回　2021 年 1 月 14 日
　渡部 鮎美（民俗学）「自由と束縛の民俗学－ムラ社会は不自由なのか－」
　前田 修（考古学）「A contingent past, an unfolding future」

毎回 2 人ずつ、これまでの来歴や現在の研究内容、さらに筑波大学で学んだことが現在の仕事にどう役立っているかなどについての「現場の声」が紹介され、参加者との質疑応答が行われた。学生・院生にとって比較的年齢が近い教員の研究者としてのキャリアを紹介することで、参加学生が将来の選択肢として歴史・人類学サブプログラムへの進学を考えるうえで参考となる指針を示すことができたといえる。

上述の通り、コロナ禍の中での実施となったため、すべての回がオンライン（zoom）での開催となったが、その利点と懸念点も見えてきた。利点としては講座の開催時間を 19 時とし、学期中でも学生が参加しやすい（自宅からでも・何かしながらでも参加できる）時間帯に講座を実施することができたこと、さらに事前登録は不要、途中の入退室も可能とすることで、参加の（心理・環境面での）ハードルを下げる環境ができたこと、学外の遠隔地在住者の参加が可能になったこと、などが挙げられる。その結果、各回 20 名以上の参加者が集まり、昨年度に比べ、参加人数が増加した。また、チャット機能を用いて講師に対する質問を受け付けることで、活発な質

疑応答を進めることができた。講師となった教員との個人的な連絡を継続している参加者もおり、コミュニケーションの場としても一定の役割を果たすことができたと考える。懸念点としては、実施側から参加者の様子が分からない、参加者間での親交を深めたり、新たな出会いを生んだりするようなインフォーマルな場が作りにくい、ということが挙げられる。

3.4　2021 年度

2021 年度も、前年度からコロナ禍が続いているが、教員間での話し合いを経て、オンラインで実施されている（前年に準じて zoom を利用し、時間も 19 時～ 21 時となっている）。本稿執筆時点までに 1 回実施され、20 人ほどの参加を得た。またこの回には教員によるクロストークの後、少人数グループに分かれての話し合いが行われたが、大学院進学希望の学生からの突っ込んだ質問があるなど、実りのあるものとなった。

「レキジン・アトリエ Season 4――歴史・人類学から愛を込めて」
第 1 回　2021 年 7 月 21 日
　柴田大輔・武井基晃・津田博司「いま、海外留学の話をしよう」

4．まとめ

以上、レキジン・アトリエ実施までの経緯と、実際の活動について記述してきた。最後に、ここから明らかになったレキジン・アトリエの背景とその役割、そしてこれからについて、簡単にまとめておく。

まず、レキジン・アトリエが組織された背景としては（1）歴史・人類学内部での共同研究の土壌と、（2）改組等、大学･組織の置かれた状況に関わる疲弊感や閉塞感への意識、また直接的･短期的な要因として（3）学類からの専攻進学希望者の減少（それに伴う進学希望者の全体的な減少）という問題があったこと、が挙げられる。このうち（2）は、歴史・人類学のみならず全国の大学をここ数十年に渡って取り巻いてきた問題である。それに対し、山澤も「学内行政・国策に対して抵抗しつつ、和気藹々と研究を楽しみたいという思いは、ずっと歴人の底流に流れていた」（私信、2021）と書くように、歴史・人類学においては（しばしば内部での対立や問題も無くはないが）連携・協働して研究を楽しもうとする雰囲気が持続してきた。こうした前向きで自由な雰囲気が、苦境を乗り越えていく力と、実際の様々な研究プロジェクトや懇談の場を生み出しているといえる。さらに言えば、この「前向きで自由な雰囲気」と「プロジェクト・場」は相互に支え合うものであると考えられるので、現在いまだコロナ禍からの出口が見えない中ではあるが、今後も楽しみながら新たなプロジェクトや場を生み出していくことが重要になるだろう。

それによって前向きに研究に取り組める環境が生み出されていくことが、(3) のような具体的な問題の改善にもつながっていくはずである。

次に、レキジン・アトリエが実際に果たしてきた役割としては、(1) 参加者（おもに学類学生）に、歴史・人類学および文系大学院で学ぶということ、研究者になることに関わる面白さの一端を伝えたこと、(2) 歴史・人類学内部での教員間の相互理解と連帯を強化したこと、そして本稿ではあまり触れていないが (3) 歴史・人類学の外でも話題を喚起したこと、が挙げられる。2021 年度は人文社会科学研究群での公開講座が例年以上に開催されているが、これも歴史・人類学の動きの間接的な効果と考えることができるかもしれない。

今後、求められるのは、上述のように、レキジン・アトリエをもとにした新たな展開としての研究や出版プロジェクトであろう。とりわけ国際的な発信が求められる現在、その視点をもってプロジェクトを進めることが、歴史・人類学のプレゼンスをさらに高めていくことにつながるはずである。他方、懸念されることとしては、ここまで書いてきたことの裏返しになるが、持続による飽きや形骸化のことが挙げられる。今のところは幸い、参加する教員の意欲もあり、また研究員を含めここ数年は新しいメンバーもあったことで、毎年、新たな人に登壇してもらったり、目新しいテーマで会を企画したりすることもできた。しかし現状として教職員が置かれている窮状に大きな変化があるわけではなく、仕事が増える中で余裕を持って取り組むことは必ずしも容易ではない。こうした中でいかに役割を果たしていくか。上に挙げた (1) に対しては、オンラインでの実施が継続するとなった場合、その利点と制約を考慮しながら、参加者を引き付けるために、広報の方法（ウェブサイトや SNS、動画サイトなどの積極的利用）や内容において、より工夫していくことを検討する必要があるだろう。加えて、実際に進学者の増加につなげるには、進学へのハードルとなっている金銭的な問題の解消に向けての制度的な対策も望まれるところである。(2) については、この段落のはじめに書いた通り、研究や出版プロジェクトなどの新たな展開が必要であり、それに向けて、「破壊と再生」「ユートピア」「人新世」など、相互に共有できるようなキーコンセプトや目的などを見出していくことが求められるだろう。

科学技術社会論の古典において P・ガリソンは、相容れなかった学問的伝統が交流していくようになるさまを「交易点（trading zone）」とそこにおける関わりのための「語彙（pidgin）」の創造というところから描いた［Galison 1999］。そのように、学際的な協働をより真剣に進めるためには、自分の専門領域の方法に対するこだわりや厳密さの一部をいったん措き、他のものを受け入れていくことで、新たな学問分野を生み出していくような柔軟性と創造性が必要になるかもしれない。また (3) について、懸念点はそれほどないが、逆にこの動きを歴史・人類学以外にも開いていくことで、歴史・人類学による状況への「応答」も、より大きな、学内あるいは社会にも影響力をもちうる動きになっていく可能性もあると考えられる。そのためには、関心ある研究者や社会人（そこには社会の様々な場所で活躍している OB・OG らも含む）とのより積極的な

連携も検討していく必要があるだろう。

以上、レキジン・アトリエという試みについての、2021 年 9 月時点での報告と展望である。今後、これまでの蓄積の先に、現時点では予想できていなかったような面白い展開が生まれてくることを期待したい。

謝辞

上記の通り、レキジン・アトリエは人文社会科学研究科（当時）および人文社会科学研究群の公開講座支援経費を受けて行われている。経費を支援してくださっている研究群、実施に関わってくださっている歴史・人類学専攻 / サブプログラムの教職員や大学院生の方々、および各回の参加者に感謝します。また、本稿執筆の機会を与えてくださった徳丸亜木専攻長 / サブプログラムリーダー、武井基晃『歴史人類』編集委員長、および本稿執筆にあたり貴重な情報やご意見をお寄せいただいた山澤学先生、前田修先生、上田裕之先生、渡部鮎美さんに感謝します。

参考文献

山澤学 2016「変革期の破壊と再生研究序説」伊藤純郎・山澤学編『破壊と再生の歴史・人類学：自然・災害・戦争の記憶から学ぶ』筑波大学出版会，pp.v-xi.

Galison, Peter 1999 Trading Zone: Coordinating Action and Belief. In *The Science Studies Reader*, Mario Biagioli (ed.), Routledge, pp.137-160.

補遺：アンケート

以下、2021 年度のレキジン・アトリエ実施に際し、歴史・人類学専攻／サブプログラム内で大学院生の状況を知り、指導・サポート体制の整備への参考とすること、および専攻の広報（入試説明会等）での説明に活用することを目的として、広報委員会で行った在籍大学院生アンケートの結果を、参考として掲載する。

調査対象は上述の通り歴史・人類学専攻／ SP 在籍の大学院生で、アンケートはオンライン（googleform を利用）で行われた。専攻事務室より調査対象者に一斉メールで参加を呼びかけ、2021 年 6 月 18 日～ 7 月 4 日にかけて回答を収集した。その結果、全体の約 25%にあたる 19 名から回答を得た。回答者は、学年としては 2 年め・3 年め（博士後期 1 年めを含む）・4 年めが 26.3%（5 人）、1 年めが 10.5%、それ以外が 10.6%、出身としては国内が 8 名（学内が 5 名、うち人文学類が 4 名）、留学生が 11 名であった。

以下、いくつかの質問について結果を記す。

「どのようにして歴史・人類学 SP/ 専攻を知りましたか」（複数選択可）という質問には、「関心ある研究者の所属先だった」という選択肢が最大（57.9%）、ついで「インターネット等で自分で見つけた」（26.3%）「筑波大生なので知っていた」（21.1%）という回答が上位を占めた。「な

ぜ歴史人類学 SP/ 専攻に入ろうと考えましたか」（複数選択可）については、「自分のテーマにあった教員・コースがあった」が 84.2%で群を抜いていた。これらからは、多くの回答者にとって、歴史・人類学を選択した決め手は「教員」であったことが分かる。

また、大学院進学にあたっての不安要素については①将来のキャリア（70.6%）、②現状での自分の能力（70.6%）、③大学院生時の経済状況（35.3%）、が主要な回答であった。このことは、現時点での将来のキャリアとしてアカデミックポストへの就職を希望している人が多く（63.2%）、ついで学芸員やアーキビストなどの専門職を希望している人が多い（47.4%）という点とつながっているだろう。

なお、ここで挙がっていた経済事情について、現在の収入と支出について質問したところ、以下のような回答があった（図 1、2）。回答数が少ないが、大学院生は毎月 10 ～ 15 万円程度の生活費で暮らしていると推定することができる。なお、生活環境としては回答者の 88.2%が大学から 15 分以内の距離に住み、住まいとしてはアパート等で独居が 57.9%、学内宿舎が 26.3%で、この二つで大多数を占めた。

次に歴史・人類学の研究環境の良いところ（複数選択可）としては、「教員が信頼できる」が 94.7%で最多の回答であった。この点は、上記のように大学院進学の決め手が教員であったということとつながっているといえるだろう。つまり、教員とよい関係を形成することが歴史・人類学で学ぶことに満足を感じるうえで重要な要因となっている、ということである。逆に問題点としては、「研究に必要な史資料が不足」（61.1%）に加え、「研究に必要な予算が不足」「学内に使

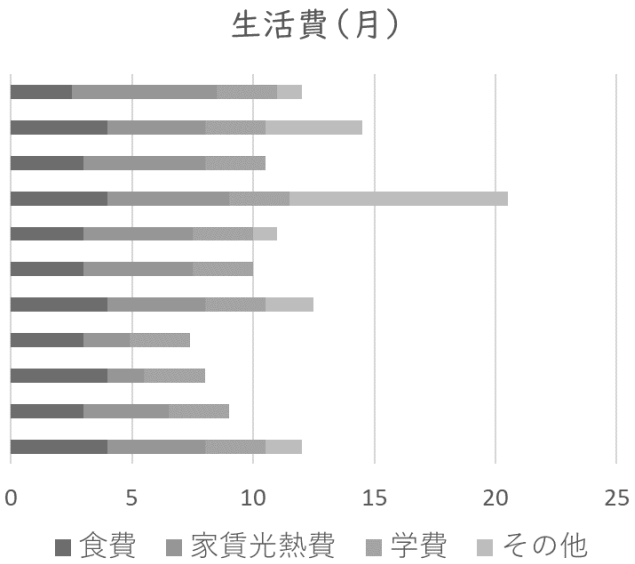

図 1　毎月の生活費（回答者 11 人、単位：万円）

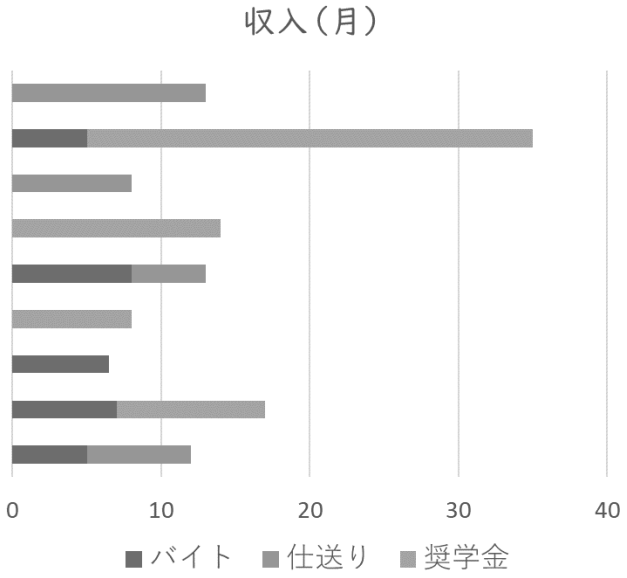

図２　毎月の収入（回答者９人、単位：万円）

える設備が不十分」などが挙げられた。こうした点はできることであれば、組織的な改善を求めたい点である。

また、コロナ禍による研究の計画や遂行への影響としては、自由技術で以下のような回答があった。

- 「海外への研究調査に行くことができない。国内の調査も大学図書館の閲覧制限により、相互貸借・複写サービスなどはあるとはいえ十分にできない状況にある。」
- 「コロナの原因で、帰国できなくなり、史料の収集が困難になりました。」
- 「対面になることを避けているため、フィールドワークに行くことが難しくなり、研究を行うことや今後の研究を計画することが難しくなった。また、昨年度は実家で生活していたため、大学図書館等へのアクセスが難しくなり、研究に必要な文献を入手することが難しくなっていた。」
- 「コロナで調査が難しくなって、研究の方法を変えざるを得ませんでした。また、それより大きな問題だったのは、精神的な負担が非常に多くて、ほぼ研究と勉強ができなかった数ヶ月があったのです。今はその問題を自分で何とか乗り越えることができたのですが、大学から精神的なサポートがあまりなかった印象です。研究と何か問題があっても、精神的な問題がなければ、その他の壁を乗り越えることができると思います。サポートグループ等があったら院生の皆が安心してより良い研究ができると思います。」

関連して、研究に関して、困っていることや、専攻／ SP・大学に望むこととしては、自由記述で以下のような回答があった。

- コロナ休学制度を臨時措置ではなく、コロナ期間在学の学生に対して、全体的にコロナ休学期間を付けて欲しい
- 図書館とは別に辞書や文献・資料を完備した共有スペースがあるとよい
- コロナで困っている院生にサポートグループ等があるとよい
- 専門書の電子書籍がもっとあるとよい。海外の大学図書館等との連携が強化されオンラインで手に入る資料が増えるとよい
- 海外の大学とのジョイントディグリーの機会が増えると海外留学がしやすくなると思います。

これらの点は、今後の専攻／ SP における教育を進める上で大いに参考にするべき内容である。

この他、毎週の研究に充てる時間や授業準備に充てる時間、あるいは研究助成金への応募などについても質問したが、回答のばらつきが大きく、何かを見出すには至らなかった。

なお、全質問は以下の通り。

1．あなたの属性について

- 現在、何年目ですか（博士課程からの入学者は便宜上、入った年を 3 年目と数えてください）
- 学部レベルではどこで学んでいましたか
- 現時点での将来の進路の希望を教えてください（複数回答可）

2．歴人 SP/ 専攻を選んだ理由について

- どのようにして歴史人類学 SP/ 専攻を知りましたか（複数選択可）
- なぜ歴史人類学 SP/ 専攻に入ろうと考えましたか（複数選択可）
- 大学院進学にあたり不安要素はありましたか（複数選択可）
- その不安要素について可能であればより詳しく教えてください（記述）
- 現時点での歴史人類学 SP/ 専攻の感想等あれば教えてください（記述）

3．研究について

- 現在の環境はどのような研究上アドバンテージがありますか？（複数回答可）
- 現在の環境は研究上問題点がありますか？
- コロナ禍によってあなたの研究の計画や遂行はどのような影響を受けていますか？可能な範囲で書いてください。
- 研究助成金（学振、留学関係等含む）に申請したことはありますか？
- 申請経験のある方に伺います。助成金の書類はどう作成していますか（複数回答可）

・　研究助成金（学振、留学関係等含む）を獲得したことはありますか？
・　獲得経験のある方に伺います。どの助成金を獲得しましたか？またその用途は何でしたか？（記述）
・　研究に関して、困っていることや、専攻/SP・大学に望むことがあれば教えてください（記述）

4．院生生活について

・　週に授業はいくつ受けていますか。
・　授業の準備にかかる時間は一週間で平均何時間ぐらいですか。
・　週に何時間ぐらい自分の調査・研究にあてていますか。
・　アルバイトは週にどのぐらいしていますか。
・　生活費は月いくらぐらいですか。差し支えない範囲で内訳も教えてください。例、食費3万、家賃・光熱費等4万、学費2.5万、交通費1万、など（記述）
・　収入は月いくらぐらいですか。差し支えない範囲で内訳も教えてください。例、バイト5万、仕送り3万、奨学金3万、など（記述）
・　コロナ禍で収入や支出に影響はありましたか？（記述）
・　大学周辺に住んでいますか？（おおむね15分以内の距離）
・　住まいは以下のどれですか？
・　住まいに関する問題があれば教えてください。
・　コロナに関わることを含め、生活上で困っていることや、大学・専攻/SPに望むことがあれば教えてください（記述）